二・二六事件慰霊像

高瀬　雅弘
（弘前大学教育学部教授）

東京都渋谷区宇田川町。渋谷区役所からほど近い渋谷税務署の敷地の一角に、三段の石積みの土台（というより塔のようである）の上に、右手を高く上げ天を指さす観音像が建っている。

この場所は1936（昭和11）年2月に発生した二・二六事件を主導した陸軍将校22名が処刑された東京陸軍衛戍刑務所跡地にあたる。像の横にあるレリーフには、「建立　佛心会　河野司　設計　川元良一　彫刻　三国慶一」の名が見える。

川元良一と三国慶一はともに弘前市茂森町に生まれた。川元は1890（明治23）年、三国は1899（明治32）年の生まれである。川元は建築家として同潤会アパート、軍人会館（九段会館）、日産館など数々の近代建築を手がけた。

彫刻家の三国は10代から文展（文部省美術展覧会）、帝展（帝国美術展覧会）に入選するなど、早くからめざましい活躍を遂げていた。戦後の1948（昭和23）年には、青森大空襲の犠牲者の冥福と平和を祈念した平和観音像を2年の期間をかけ、文字通り心血を注いで完成させている。

ではなぜ同郷の建築家と彫刻家が二・二六事件慰霊像の建設に携わることになったのか。建立者である河野司（事件に参加後自決した河野寿大尉の兄）の回想録『ある遺族の二・二六事件』にはその経緯が書かれている。

事件に関わった犠牲者、自決者、刑死者の慰霊などを目的とする佛心会が、刑場跡地の払い下げを受けて慰霊像の建立を計画した。しかし資金面に加え、当時の事件に対する世間の印象もあり、思うように進まなかった。

そこで河野が相談したのが川元である。軍人会館の建設時、河野はたびたび川元のもとを訪れ、面識があった。戦後再会し、共通の趣味であるゴルフを通じて交遊が始まった。慰霊像について相談したところ、川元は協力を約束した。そして事件に関する書物を読み込んで建立案をまとめ、彫像の制作者として三国を推薦した。1963（昭和38）年のことである。

三国はこの依頼にただちに返事をせず、かなり逡巡したようである。しかし、半年以上の時間のうち、ようやく引き受けた。この間三国もまた事件に関する文献を読み漁ったという。

慰霊像のデザインは、三国のアトリエに川元と河野が何度も足を運び、議論を重ねながら決定していった。近代的な観音像（の原像）は日展（日本美術展覧会）に出品された。しかし資金の調達が難航して、一時は計画の再検討の必要にも迫られた。そうした苦境を募金によって乗り越え、1965（昭和40）年2月26日、慰霊像は除幕式を迎えた。

川元の子息である川元良夫さんによれば、この慰霊像は最晩年の仕事であり、大きな思い入れをもって取り組んだそうである。一方、三国にとっては自身が手がけた最大の作品であり、また生涯を通じての代表作として挙げるものとなった。

川元と三国のつながりを感じさせるものが弘前市にある。禅林街の一角、長勝寺の隣に建つ弘前忠霊塔は、川元の設計により1945（昭和20）年11月に完成した。その内部に本尊として収められたのが、三国が戦時特別展に出品した「防人」（「軍神」）像である。ともに戦時中、弘前市に疎開していた2人は、忠霊塔建設の過程で交流を深めていたのかもしれない。

激動の時代のなかで命を失った人びとを慰霊する場が、同郷の建築家と彫刻家のコラボレーションによって生み出され、弘前と東京で、それぞれ静かに時を刻んでいる。

二・二六事件慰霊像＝2024（令和6）年・筆者撮影